

うえのどののこけあまごへんじ
上野殿後家尼御返事

御書新版 1834頁 1行目〜4行目
御書全集 1505頁 8行目〜10行目

法華經ほけきょうの法門ほうもんをきくにつけてなおな

お信心しんじんをはげむを、まことの道心者どうしんじや

とは申もうすなり。天台てんだい云いわく「從藍而青じゅうらんにしよう

（藍あいよりして、しかも青あおし）」云々うんぬん。こ

の積しやくの心こころは、あいは葉はのときよりも、

なおそむればいよいよあおあおし。法華經ほけきょう

はああおいのごとし、修行しゆぎようのふかきはいよ

いよあおあおきがごとし。

通解

法華經の法門を聞きたびに、ますます信心に励んでいく人を、真の求道の人というのである。

天台は「青は藍から出て、藍よりも青い」と述べている。この言葉の意味は、植物の藍は、その葉からとつた染料で重ねて染めれば、葉の時よりも、ますます青みが深まるということである。法華經は藍のようなもので、修行が深まるのは、ますます青くなるようなものである。

語句

從藍而青

天台大師の『摩訶止観』にある言葉で、「藍よりして而も青し」と読み下す。中国の思想家・荀子の「青はこれを藍より取りて、しかも藍より青し」を踏まえた言葉。藍は青色の染料となる植物だが、その葉を絞った染色液は、鮮やかな青色ではない。ところが、何度も重ねて染めることによって、色が濃く鮮やかになる。ここでは修行を重ねて信心をより堅固にし、福徳を現していく譬えとして用いられている。ほかに、後継者の成長の意味として用いられることもある。